

茨木市立平田中学校 全国学力・学習状況調査分析結果

令和5年10月作成

【今年度の結果と取組みについて】



(領域ごと)

①言葉の特徴や使い方に関する事項	概ね良好な結果であった
②情報の扱い方に関する事項	概ね良好な結果であった
③我が国の言語文化に関する事項	概ね良好な結果であった
④話すこと・聞くこと	概ね良好な結果であった
⑤書くこと	概ね良好な結果であった
⑥読むこと	概ね良好な結果であった

(問題形式)

①選択式	概ね良好な結果であった
②短答式	概ね良好な結果であった
③記述式	概ね良好な結果であった

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

本校の特徴的なことについて

- ・最も正答率の高かった設問は、「2一」の事象や行為、心情を表す語句について理解しているかどうかをみる内容であった。
- ・最も無解答率の高かった設問は、「1四」の聞き取ったことを基に、目的に沿って自分の考えをまとめることができるかどうかをみる内容であったが、無解答率は全国の平均より下回っている。

分析

1. 全体的な傾向及び全国との比較

全体的な傾向として、概ね良好な結果であった。全国平均との比較において、「情報の扱い方に関する事項」、次いで「読むこと」の平均正答率が高かった。しかし、「言葉の特徴や使い方に関する事項」や「話すこと・聞くこと」の平均正答率は低かった。

2. 分析に対する課題

多くの設問で全国の平均正答率を上回っているが、文章の前後関係から情報を読み取り、文脈に沿った内容を適切に表現する力に課題がある。問われている内容を読みとり、自分の考えを表現する内容の無解答率が高く正答率が低いことを考えると、情報をまとめ、自分の考えを具体的に表現していく力を育成する必要がある。

3. 授業での重点的な取組み

内容を読み取り、見出しをつける・要約する・鑑賞文・調べ学習など自分で表現する言語活動を単元ごとに取り入れて授業を構成している。他の人の表現から学ぶことや、より伝わる表現にするために一つひとつの表現にこだわって表現することなどさらに一段階深めた取組みや学習をしていく。また、語彙を増やすために、漢字学習や読解の際に、語彙の説明や学習に取り組む必要があると感じている。

(領域ごと)

①数と式	概ね良好な結果であった
②図形	概ね良好な結果であった
③関数	概ね良好な結果であった
④データの活用	概ね良好な結果であった

(問題形式)

①選択式	概ね良好な結果であった
②短答式	概ね良好な結果であった
③記述式	概ね良好な結果であった

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

本校の特徴的なことについて

- ・最も正答率の高かった領域・設問はともに「数と式」であり、計算問題など基本的な問題の定着度が高いことが読み取れる。
- ・全国の平均正答率より上回っている領域は「図形」であり、証明問題の正答率が特に高かった。
- ・全国の平均正答率より下回っている領域は「データの活用」であった。

分析

1. 全体的な傾向及び全国との比較

すべての領域において概ね良好な結果となり、全国の平均正答率を上回ることが出来た。

特に「図形」の領域においては、「思考・判断・表現」の観点の平均正答率が高く、問題に対し仮定に基づいて証明することができている。一方で、自分で説明する問題などの設問の無解答率が高く、二極化している傾向が見られる。

2. 分析に対する課題

「データの活用」の領域では、累積度数の意味を理解しているかどうかをみる設問の正答率は、全国平均を上回っていた。対して、四分位範囲の意味を理解しているかどうかをみる設問の正答率は、全国平均を下回っていた。この点においては今後定着を深めていきたい。また、「思考・判断・表現」の観点において無解答率が高くなっており、全国の平均正答率より高いものの、情報を読み取り、既習事項をどのように活用して説明するか、問題解決能力をつけていくことが必要と考える。

3. 授業での重点的な取り組み

「データの活用」の領域において、実際の資料を活用しながら学習した内容をどのように活用できるかを主体的に学ぶ授業に取り組んでいく。また、問題解決力を育むために、数学的な表現を用いて説明できる場を増やしていくために、これからの授業では「身近な教材」を準備し、生徒同士の協力し合う言語活動を多く取り入れることに重点をおいて、学習の基本知識の定着度の向上につなげていきたい。

(領域ごと)

①聞くこと	概ね良好な結果であった
②読むこと	概ね良好な結果であった
③書くこと	概ね良好な結果であった

(問題形式)

①選択式	概ね良好な結果であった
②短答式	概ね良好な結果であった
③記述式	概ね良好な結果であった

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

本校の特徴的なことについて

- ・最も正答率の高かった設問は、「聞くこと」の領域の「I (1)」で、情報を正確に聞き取ることができるかどうかをみる内容であった。
- ・最も正答率の低かった設問は、「書くこと」の領域の「10」で、日常的な話題について、事実や自分の考えなどを整理し、まとまりのある文章を書くことができるかどうかをみる内容であった。
- ・最も無解答率の高かった設問は、「書くこと」の領域の「8 (2)」で、社会的な話題に関して読んだことについて、考えとその理由を書くことができるかどうかをみる内容であった。

分析

1. 全体的な傾向及び全国との比較

すべての領域において概ね良好な結果となり、全国の平均正答率を上回ることが出来た。

「読むこと」に関しては、良好な結果を残しているが、「書くこと」に関してはやや課題がある。また、「話すこと」調査に関してもやや課題が残り、無解答率は全国の平均より下回っていたが、質問された内容に明確に答える力や自分の考えをまとめて表現することに苦手意識があると考えられる。

2. 分析に対する課題

全国平均と比較して概ね良好な結果であったが、文と文の間を正確に読み取ったり、相手の質問に対して的確に答えたり、自分の考えをまとめて理由を書く分野において課題がある。つまり、聞いて理解し書く、読んで情報をまとめ書くなど技能統合型の設問に対して課題がある。

3. 授業での重点的な取り組み

「書くこと」に関してはさらに練習が必要であり、様々な話題に触れ、自分の考えをまとめて表現することに慣れさせていくことも重要であると考ええる。「話すこと」に関しては、週1回のNET参加の授業を活用し、会話の場面を設定し自分の考えを具体的に話す機会をさらに増やしていくことが重要だと考える。また、基礎的な力についてはついてきているので、基礎力の定着とさらなる向上をめざし、話の内容を理解し、的確に読み取れる読解力を育成する。

〇●経年比較●〇

全体的な傾向についての分析

- ・昨年度大きく上回っていた正答率は、今年度は国語・数学ともに若干下回ったが、大きく変化することなく、ほぼ横ばい状態だといえる。
- ・昨年度、全国平均を下回っていた無解答率は、今年度は若干上回ったが、ほぼ全国平均と同じ水準で推移している。

学力高位層と学力低位層、エンパワー層についての分析

- ・昨年度増加した学力高位層は、今年度は若干減少したが、ほぼ横ばい状態だといえる。
- ・学力低位層は、昨年度よりも減少しており、ここ数年間減少傾向にある。基礎学力の定着が進み、底上げ効果があらわれてきている。
- ・昨年度大きく減少したエンパワー層は、今年度は若干増加しているが、ほぼ横ばい状態である。

〇●取組み●〇

学力向上に関する取組み

1. 基礎学力の定着

- ① テスト1週間前からの学習サポート体制の確立
 - ・学力低位層、特にエンパワー層を底上げする取組みを行う。(放課後学習会・個別学習会の実施)
 - ・家庭学習の定着化を図るために自己管理能力を身につける取組みを行う。(いま未来手帳・まなびログの活用)
- ② 定期的に基礎学力に関する授業内テストを実施
 - ・国語は漢字や語句、数学は計算問題、英語は単語に関する授業内テストを行う。
 - ・授業内テストで一定の基準に達していない生徒対象の学習会を行う。
- ③ 定期テストの活用
 - ・前もって生徒に出題する単元を予告し、既習事項の復習をさせ、テストの内容に織り込む。
- ④ 長期休業中の学習会の実施
 - ・国語、数学、英語を中心に取り組む。学力低位層の中でも、課題の大きい生徒に焦点を当てる。

2. 言語活動の充実

- ① 言葉を使って「書く」力を伸ばす取組み(国語科・英語科)
 - ・表現の課題を設定し、記述活動に取り組む姿勢を育てる。
- ② 事柄の特徴を考え、数学的な表現を用いて「説明する」力を伸ばす取組み(数学科)
 - ・条件を変えて考察する場面を設定し、数学的に表現する活動に取り組む姿勢を育てる。
- ③ 英語で互いの考えを伝えあうなど「使える英語」力を伸ばす取組み(英語科)
- ④ 言語能力や読解力、情報活用能力を伸ばす取組み(すべての教科)
 - ・日常の場面で複数の情報から課題を見つけ出し、書いて説明する活動に取り組む姿勢を育てる。

3. 授業方法・内容の工夫と改善

- ① 分割授業の推進(数学科・英語科) … スクールサポーターの入り込み
 - ・全学年で行っている習熟度別の分割授業をより早い時期から実施する。
- ② ペア学習やグループ学習の定着(ユニバーサルデザインを取り入れた授業)
 - ・グループやペアでの学びを組織し、「学びあい」を定着させる授業方法を研究・実践していく。
- ③ ICTを効果的に活用した授業の推進
 - ・「一斉授業」「個別学習」「協働学習」それぞれの学習場面を相互に組み合わせた学びの場を形成する。

4. 学校全体としての取組み

- ① 朝の帯時間の活用 … 読書タイムとして設定する。テスト1週間前は朝学習の時間とする。
- ② リーディングスキルモデル事業を活用した研究推進体制の確立
 - ・年3回の研究授業を柱に教科会議を有効活用し、読解力などの言語能力等の育成に取り組む。